

「断金の契り」説話の展開

大島 由紀夫 *

(二〇一二年一月二九日受理)

一、はじめに

「断金の契り」とは、友人間のきわめて固い契り、非常に親密な友情という意を表す成語で、「断金の交わり」などとも用いられる。「断金」の語意は、文字どおり「金属を断ち切る」ということであるが、そこから「金属をも断ち切るほどに固いこと」「きわめて固い交わり」を意味する。『易経』繫辭伝・上には、

子曰、君子之道、或出或處、或默或語。二人同心、其利斷金。同心之言、其臭如蘭。（孔子は次のように言う。君子の道は、時には出でて朝廷に仕え、時には退いて野におり、時には黙して語らず、時には大いに語り論ずるなど、時に応じてさまざまであるが、その心情の正しさを重んじる点においては変わりがない。正しい心情の持ち主が二人して心をあわせれば、その鋭さは金鉄をも断ち得るほどであり、心を同じくする者のことばは、蘭の香りのごとくにかぐわしいものである。）

※傍線は筆者による

と記される(注1)。

「断金契」の古い用例としては、六世紀初に成立したと考えられる『水経注』三一・涑水の次の箇所が挙げられる(注2)。

城西有孔嵩旧居。嵩、字仲山、宛人。与山陽范式有断金契。貧無養親、賃為阿街卒、遣迎式。式下車把臂曰、子懷道卒伍、不亦痛乎。嵩曰、侯嬴賤役晨門、卑下之位、古人所不恥、何痛之有。故其讚曰、仲山通達、

*人文科学系・日本文学

卷舒無方、屈身廝役、挺秀含芳。

※傍線は筆者による

孔嵩(仲山)と范式(巨卿)との関係を述べる中で「有断金契」と表現されている。この両者については四節で再述する。

国書においては、『日本書紀』卷二二・推古天皇一九年二月条の「我雖異国、心在断金」を「断金」の早い用例として挙げることができる。また、「断金の契り」という成語の用例は、例えば『伝教大師消息』に、

見書驚痛。住持、法鬘於闍梨。老僧之志、亦不用。何忽然忘断金契。更請不意暇。若有懺罪事。具告弊僧。丈夫厭衆口煩。棄捨法船哉。誠願暫閉室門。坐繩床上。不得外出。東去西去。此深所望。謹附廻使円光行者。以和南。

六月廿九日

下同法最澄^{狀上}

塔院禪房^側

とあり(注3)、また、『往生講式』(一一世紀末成立)にも、

第六因円果満者。…中略…請仏加被「先來此界」。導結縁者「訪無縁者」。或為「慈念鞠育之父母」。或為「至孝鍾之男女」。或為「春風秋月之良友」。或為「飛華落葉之同行」。断金契深。芝蘭談芳。……後略

と用いられており(注4)、平安時代の仏家の間では定着して流通していたようである。

この成語の由来を語る説話を本稿では「断金の契り」説話と称し、以下にその展開の諸相を概観して、この説話が唱導の世界で生成・展開したことを述べる。

二、断金の兄弟譚

「断金の契り」説話を早くに記すのは、『宝物集』である。その巻一には次のように記される（注5）。*後述する関係から内容を二分し、A・Bと付す。

A 兄弟五百両を捨ていふは、兄弟各五百両の金を父の手よりせうぶにえて、帰る道にて、第五百両の金をすつ。兄ゆへをとふに、弟なく／＼語て云、「汝が持所の金五百両を取て、千両になして持ん為に、汝を／＼してんと思ふ一念おこりつ、故に、金はうたてき物なりと思て、捨る也」といひければ、兄も語て云、「我汝を殺して、五百両を取て、千両になさばやとおもへる也」とて、兄も五百両を捨つ。此ゆへに兄弟をば断金の契とはいふ也。

B 断金の契りと云事、いま一説あり。

仏、阿難をぐして道を過給ふ。道のほとりに穴あり。中に金あり。仏是を「毒蛇」との給ふ。阿難是もさととりて、「大毒蛇」と云。そば成人是をみて、蛇はなくて金也とて、悦で取つ。おほやけ聞しめして、金をめすに、ある限りまいらせけるに、「なを残りあるらむ」とせめをかぶりける時、仏の毒蛇との給ふ事、思ひあはせける。

『宝物集』のこの箇所は、「抑人の為には、何か第一の宝にては侍る」と宝物をめぐる論が展開される中で、「まことの宝には金と云物こそ侍れ」とするのに対して、金は「宝に非ず」と反論が出される場面である。Aの直前では、こゝをもつて、楊震は四知を恥ぢてとらず、兄弟は五百両を捨、仏は毒蛇との給ふ。阿難は大毒蛇と云也。

と述べられ、「震畏四知」の話からA・Bに話が及ぶのである。

この『宝物集』巻一収載のA・B話は、『法苑珠林』七七を出典とするもので、Aは『大智度論』、Bは『大莊嚴論』を、『法苑珠林』はそれぞれ典拠として明記している。Bについては次節で検討することとし、本節では以下、『宝物集』の引用でAとした「兄弟譚」について検討する。

『大智度論』巻第二の該当箇所は、次のとおりである（注6）。

復次財物は種種煩惱罪業因縁。若持戒禪定智慧種種善法。是涅槃因縁。以是故財物尚応自棄。何況好福田中而不布施。譬如下有兄弟二人。各擔十斤金。行道中更無余伴。兄作是念。我何以不殺弟取金。此広路中人無知者。弟復生念。欲殺兄取金。兄弟各有惡心。語言視瞻皆異。兄弟即自悟還生悔心。我等非人与禽獸何異。同生兄弟

弟而為少金。故而生惡心。兄弟共至深水辺。兄以金投著水中。一弟言。善哉善哉。弟尋復棄金水中。兄復言。善哉善哉。兄弟更互相問。何以故言善哉。各相答言。我以此金故。生不善心。欲相危害。今得棄之。故言善哉。二辞各爾。以是故知財為惡心因縁。常応自捨。何況施得大福而不施。

『大智度論』のこの兄弟譚は、『法苑珠林』の他に『諸経要集』一五にも転載される。「金によつて悪心を起こした兄弟が、これを懺悔して因となった金を捨てた」という説話であるが、『宝物集』が『大智度論』と大きく異なるのは、この兄弟譚を「断金の契り」という成語の由来譚として機能させている点である。『今昔物語集』巻四―三四「天竺人兄弟持金通山語」も同話として捉えられるものの、「断金の契り」とは結びついていない。今野達氏が、『今昔物語集』当該話と『法苑珠林』（『大智度論』）とを比べ、「同文性に欠け、意訳敷衍が目立つ」ことから、出典となった国書の介在を想定されているが（注7）、『今昔物語集』のみならず、『宝物集』の場合も仏典との間にクッションとなる国書を指定すべきであろう。

この兄弟譚は、東大寺北林院本『言泉集』の兄弟姉妹帖にも「大論云」として原拠本文が引かれており（注8）、唱導の場でも用いられていたようである。「安居院の唱導と密接に関わる金玉句を類聚して編まれたとおぼしい」（注9）とされる内閣文庫蔵『金玉要集』（室町末頃写）の「兄弟契之事」では、次のように記される。

抑、兄弟断金之契。申事候。昔天竺有一人、長者。子二人持。命終スル時、兄弟者呼寄。金一千両取。出。五百両宛二人之子与之。親逝去之後、兄在思。様。殺我弟。々々所持五百両金取。我金添。成二千両主思。伺隙。又弟思様。我早殺兄。々々所持五百両金取。加我金。成一千両之主思。互殺伺ケリ。有時兄カ申様。是、口惜事共哉。魔縁被狂ニヤ。又貪愛之深重ニヤ。心中カハル害心持事。口惜態。我等同ク身体髮膚受父母、同氣宿胎内。一腹一姓。異他。在天比翼之鳥、在地同連理之枝。拙我心云。弟子細語ケレハ、弟流涙。我身汝如云。一千両之主。成ラン事思。惣財宝。口惜ニ世之怨トテ、各々此金海沈ケリ。此由聞。天聴ケレハ、心賢者也ケリトテ、乍二人付大臣位。給ケリ。其兄弟之契。断金之契云。 *云：傍訓「ノ玉フ」

この説話が唱導談義の場で語られていたことは、天正一三年（一五八五）写

『直談因縁集』に収載されていることから窺える。その四卷ノ三八話(宝塔品)は、次のとおりである(注10)。

一、兄弟断金ノ契ト云々、有者、子ヲ二人持。而、親、臨終砌ニ、千両金、持候ヲ、等分ニ五百兩宛、金ヲ分テ出ヌ也。而、兄弟、同道ニ行ニ、一人、金ヲ打捨、悲歎ス。時、一人、汝、何トシテ金ヲ捨、歎ク。親ノ別□悲ム歟、申ニ、サレハコソ、我、懺悔ヲ仕ン。此金ニ貴方ノ金副ヘ、千両持シカ為ニ、兄ヲ殺害致シト存候カ、今生ハ夢ノ世ナレハ、我レ兄ヲ奉テモ殺、幾程存生セン、存ルニ、但、此金故ナレハ、此金ヲ恨ト、思歎候、ト申。汝モ左様ニ存ル、我モ左様ニ、汝カ金ヲ取、千両ニセント存也、ト懺悔ス。時、金ヲ捨、発菩提心シテ、仏道修行ニ趣、終、往生極樂ス、ト云。

*「二人」：傍記「五人」

ここで注目すべきは、『金玉要集』『直談因縁集』のいずれもが、『宝物集』Aと同様に「断金の契り」という成語の由来譚となっていることである。即ち、仏典によつて伝来したこの兄弟譚は、日本において「断金の契り」の由来譚として装いを変え、唱導談義の場で流通していたということである。

それでは、この兄弟譚と「断金の契り」はどのようにして結びついたのであろうか。これらの接合を媒介したのは、中国より伝来して唱導の世界で頻りに用いられた孝子伝であつたろうと考えられる。『止観輔行伝弘決』巻四之三所引・蕭広済『孝子伝』の「三州義士」の条では、次のように記されている(注11)。

又蕭広済孝子伝云。昔三人各一州皆孤露惻独。三人暗会。於一樹下相問。寧為断金之契。二人曰善。乃相約為父子。梁朝破三人離。

それぞれに故郷を棄てた三人が、偶々一樹下に邂逅した因縁を感じて、年長者を父とし、年少の二人を兄弟として「断金の契り」をなし、兄弟は父に孝養を尽くしたというこの説話は、中国・日本で広く流通したものである。船橋家本・陽明文庫本の両『孝子伝』においては「結断金」と表現されている(注12)。船橋家本『孝子伝』が原拠と考えられる『注好選』上・三州義士第五八では、次のように記される(注13)。

三人各棄郷土至會一樹之下。相共同宿也。於時一人問云汝等何人從何処去從何国来耶。皆互問答云為生活離家東西耳。吾等三人各有三世因感宿一樹之下。故結断金之契全期永代之昵。其長為父小年二為兄弟。桂蘭之心恒芳。膠漆之語彌深。求得財彼此不別孝養。於父猶踰骨肉。爰父欲誠子等心語。二子云我河中建舍以為居処。二子奉教運土填

「断金の契り」説話の展開

河ヲ海入リ漂流。溺波浪。雖經三年不得填作。爰二子吟云我等成不孝。不叶父命。海中之玉豈為誰耶。世上之珍復為誰也。未造小舍。我等為人耶。憂歎寢夜夢見有一人持壤投於河中。明旦見之河中填土数十余丈建屋数十宇。見聞之者皆共奇云大。孝養天神感応。河中為岳一夜建舍使父安置。天下聞之莫不嘆恩。其子終生長為五位名二千石。口卅有余以三州為性也。夫雖非親父至丹誠神明之感在。近。況骨肉乎。

*「諭」：傍訓「コエタリ」 *「為」：傍訓「セム」 *「寢」：傍訓「ネタル」

ここでは「結断金之契」という表現が用いられている。船橋家本などの『孝子伝』や『注好選』に収載される「三州義士」説話の展開について、今野達氏は、

本話は古来広範に流布し、平安以降、仏家の唱導材として講説・作文の場利用されたほか、漢詩漢文の素材ともなった。中国でもいわゆる古孝子伝類に収められて盛行したが、特筆すべきは止観輔行伝弘決四ノ三に引かれた蕭広済撰孝子伝収載話で、弘決を介して仏家に取りこまれ、室町初頭には敷衍脚色されて、「一樹の陰」の成句と結びついた物語的なものまでに成長した。

と、的確に指摘されている(注14)。

以上、『宝物集』巻一収載Aのごとき「断金の契り」なる成語の由来を語る兄弟譚について検討してきた。『大智度論』等においては「煩惱の因となる財を捨てる」ことを述べる兄弟譚であつたものが、日本に伝来した後は、『孝子伝』等の「三州義士」説話を媒介として「断金の契り」なる成語の由来を語る兄弟譚へと展開したのであつた。本来の「金属を断ち切るほどに固い」ことを表す「断金」に、「煩惱の因となる財を捨てる」意が重ね合わせられたわけだが、このような説話の成長は唱導の世界においてなされたのであつた。

三、もう一つの断金譚

さて、先に引用した『宝物集』では、Aの兄弟譚に続けて「断金の契りと云事、いま一説あり」としてBを掲げる。「釈尊が阿難を伴つて道を行くと、道端の穴に黄金があつた。これを見つけて釈尊は『毒蛇』と言い、阿難もこれを悟つて『大毒蛇』と言った。これを聞いた人が覗いて見ると黄金だったので持ち帰ったところ、公の知るところとなり、咎められて差し出したが、

まだあるはずだと責められたので、釈尊が黄金を『毒蛇』と言ったことが理解された」という話である。『宝物集』のA・Bは『法苑珠林』七七を典拠とするものであるが、Bのこの説話を『法苑珠林』は、『大莊嚴論』を原拠として掲げている。次に『法苑珠林』七七の当該箇所を引用する(注15)。

又大莊嚴論云。我曾昔聞。舍衛國中仏与阿難曠野中行。於一田畔見有伏藏。仏告阿難。是大毒蛇。阿難白仏。是惡毒蛇。爾時田中有一耕人。聞仏阿難說有毒蛇。作是念言。我當視之。沙門以何為惡毒蛇。即往其所見真金聚。而作是言。沙門所言是毒蛇者。乃是好金。即取此金還置家中。其人先貧衣食不供。以得金故轉得富饒。衣食自恣。王家禁司怪其卒富。而糾拏之繫在獄中。先所得金既已用尽。猶不得免。將加刑戮。其人唱言。毒蛇阿難。惡毒蛇世尊。傍人聞之以狀白王。王喚彼人而問之曰。何故唱言毒蛇阿難。惡毒蛇世尊。其人白王。我於往日在田耕種。聞仏阿難說言毒蛇惡毒蛇。我於今者方乃寤解。王聞此說遂放去之。

この説話は、『大莊嚴論』の他に、『十誦律』『衆經撰雜譬喻』等にも載り、『義楚六帖』卷一九・宝玉珍奇部三八「宝藏毒蛇」の項では、根本律云。仏行、見有宝伏藏、仏曰此毒蛇也。有人得之、被王知禁奪。阿難白仏言、毒蛇不謬也。

と記される(注16)。

日本の文献にも同話・類話が多く見られるが、『十訓抄』六では次のように記される(注17)。

釈尊、昔、阿難をともしなひて、おはしましけるに、人、金を落せりけり。阿難、これを見て、「毒蛇」とのたまふ。仏、また「大毒蛇」と仰せられて、過ぎさせ給ひにけり。そのあとに行く人、この金を取れりけるゆゑに、公より責めを蒙りて、おほきにわづらひけり。「楊震が四知を恥づる」、この意にや。

『十訓抄』は引用箇所の直前に「震畏四知」の説話を掲げる。『古本説話集』五五にも同構の説話が簡略に引かれる。『宝物集』のBは「断金の契りと云事、いま一説あり」としてこの説話を掲げるものの、「断金の契り」という成語とは直接に結びつけられていない。それは『十訓抄』他の同話・類話においても同様である。

「金を見つけたが見向きもしなかった」という点に着目すると、『蒙求』『世説新語』等に記載する「管寧割席」の説話が想起され、例えば『源平盛衰記』巻二「清盛息女」に「管寧方金ヲ断シ情」と記されることなどから、「断金」

が固い結びつきだけでなく、「財欲を断つ」という意でも解せられていたことは明らかであり、「断金」の語が用いられなくとも、この主題のもとに『宝物集』のBや『十訓抄』当該話が記されていることは確かである。しかし、それは財欲を断つ「断金」の例証に止まり、「断金の契り」の由来を説き明かす機能までは担わなかったのである。

四、孔仲山と范巨卿の断金譚

冒頭で、「断金の契り」の古い用例として『水経注』を掲げた。それは、孔仲山と范巨卿との関係を述べるものであった。前節で「釈尊と阿難が黄金を毒蛇として避けた」説話について検討したが、これと類似する結構をもつて、孔仲山と范巨卿を登場させる説話を記す資料がある。敦煌本・句道興撰『搜神記』一卷がそれである(注18)。次にその本文を引く(注19)。

史記曰：孔嵩者、山陽人也。共郷人范巨卿為友。二人同行、於路見金一段、各自相讓、不取遂去。前行百步、逢鋤人語曰、「我等二人見金一段、相讓不取、今与君。」其人往看、唯見一死蛇在地、遂即与鋤琢之兩段。却語嵩曰、「此是蛇也、何言金乎。」二人往看、變為兩段之金。遂相語曰、「天之与我此金也。」二人各取一段、遂結段金之交也。

孔仲山と范巨卿が「遂に段金の交はりを結んだ」とする。「断」ではなく「段」とするのは、「金一段」即ち黄金の一塊と関わるが、また、「段」は中国の古辞書類で「断、段也」などと説明されるように(注20)、「断」と通じて用いられたことによる。引用部冒頭の「史記」については不明である。

この孔仲山と范巨卿との関係については、次に引く『後漢書』独行列伝第七一「范式伝」が詳しい(注21)。

范式字巨卿、山陽金郷人也。一名汜。……中略……友人南陽孔嵩家貧親老、乃変姓名、傭為新野県阿里街卒。式行部到新野、而県選嵩為導騎迎式。式見而識之。呼嵩把臂謂曰、子非孔仲山邪。对之歎息、語及平生曰、昔与子俱曳長裾、遊息帝学。吾蒙国恩、致牧收伯、而子懷道隱身、处於卒伍、不亦惜乎。嵩曰。侯嬴長守於賤業。晨門肆志於抱關。子欲居九夷、不患其陋。貧者士之宜、豈為鄙哉。式勅県代嵩。嵩以為先傭未竟、不肯去。嵩在阿里。正身励行街中子弟皆服其訓化。遂辟公府之京師道宿下亭盜共竊其馬尋問知其嵩也。乃相責讓曰。孔仲山善士。豈宜侵盜乎。於是送馬謝之嵩官至南海太守。式後遷廬江太守。有威名卒於官。

范巨卿に関する逸話は諸書に散見し、友人譚としては『蒙求』に載る「范張雞黍」が著名である。この張元伯との関係を語る説話は、時代が下ると官大用撰の元曲『死生交范張鶏黍雜劇』などにも仕立てられて、広く流布したのであった。しかし、孔仲山と范巨卿の断金譚を記す書は、敦煌本『搜神記』の他に今のところ見いだしていない。

五、おわりに

「断金契」（或いは「断金交」という語の由来を語る兄弟譚は、二節において検討したように、日本の唱導の世界において生成・展開したものであったが、三節で検討した「釈尊と阿難の説話」は「財欲を断つ」ことの大切さを説く例証として流布したものの、その説話叙述においては直接に「断金契」なる語とは結びつかなかった。しかしながら、四節で掲げた敦煌本『搜神記』収載話の存在は、日本においても「釈尊と阿難の説話」が「断金契」の由来譚として展開する素地のあったことを示唆しているのである。

注

1 引用は、高田真治・後藤基巳訳『易经』（一九六九年、岩波書店）による。

2 引用は、中國古籍大觀『水經注（六）』（二〇〇二年、臺灣古籍出版有限公司）による。句読点等、表記の一部は私に改めた。

3 引用は、『伝教大師全集』第五（一九八九年、世界聖典刊行協会）による。

4 引用は、『大正新脩大藏經』第八十四卷による。

5 引用は新日本古典文学大系『宝物集・閑居友・比良山古人靈託』（一九九三年、岩波書店）による。底本は吉川氏蔵本（第二種七卷本）。

6 引用は、『大正新脩大藏經』第二十五卷による。

7 新日本古典文学大系『今昔物語集一』（一九九九年、岩波書店）の出典考証。

8 今野達氏は、注7の出典考証で龍谷大学蔵『言泉集』にこの説話が引かれることを指摘されている。龍谷大学蔵本は北林院本系統の近代の写本である。

9 『磯馴帖 村雨篇』（二〇〇二年、和泉書院）の解題による。以下の本文「断金の契り」説話の展開

引用も同書の翻刻による。

10 引用は、『日光天海蔵直談因縁集翻刻と索引』（一九九八年、和泉書院）による。

11 引用は、『大正新脩大藏經』第四十六卷による。

12 幼学の会編『孝子伝注解』（二〇〇三年、汲古書院）による。

13 引用は新日本古典文学大系『三宝絵・注好選』（一九九七年、岩波書店）による。

14 注13掲出書二五四頁。

15 引用は『大正新脩大藏經』第五十三卷による。

16 古典叢刊之二『義楚六帖』（一九七九年、朋友書店）により、送り仮名を略し、私に句読点を改めた。

17 引用は新編日本古典文学全集『十訓抄』（一九九七年、小学館）による。

18 注14の箇所、今野達氏は、敦煌本・句道興撰『搜神記』に「断金契」由来説話が見られることを指摘されている。

19 引用は『敦煌変文集下集』（一九八四年、人民文学出版社・北京）による。

20 諸橋轍次『大漢和辞典』卷六（一九五七年、大修館書店）、「段」の項参照。

21 引用は二十五史2『後漢書・三国志・晋書』（一九八六年、上海古籍出版社・上海書店）による。

The Development of the Story Narrating the Origin of an Idiomatic Expression “*Dankin-no-chigiri*”

Yukio OSHIMA

The idiomatic expression “*Dankin-no-chigiri*(断金の契り)” means a firm friendship. As an early instance, we are able to find this expression in “*Shui Jin Zhu*(水經注)” which is a Chinese document written in the early 6th century. In Japan, some documents written in the first half of the *Heian* era confirmed that Buddhist priests had used this expression. Sometime during the *Heian* era, this expression came to mean not only the firm friendship but also the close relationship between brothers. In the end of the 12th century, a story narrating the reason why this expression came to mean the close relationship between brothers was created. The story was narrated by Buddhist priests when they were preaching Buddhism to common people. A brief outline of the story is as follows:

One day, two brothers visited their father. The father gave many nuggets of gold to each of them. On their way home from their father’s house, the younger brother threw away his gold. The elder brother asked him “why did you do so?” The younger brother broke into tears and said “An evil thought flashed through my mind. I was going to kill you and rob you of your gold. I realized that a desire for wealth made me to contrive this horrible evil design. That was why I threw away the gold.” Then the elder brother said “I had the same thought as you had”, and threw away his gold.

After that, the close relationship between brothers came to be expressed by “*Dankin-no-chigiri*”.

Dan(断) means to cut or to stop, and *Kin*(金) means gold or metal. In the expression “*Dankin-no-chigiri*” there is a play on words, with *Dankin* meaning both “hardness that can cut off metal” and “strong willpower that can stop desire for wealth”.

In this paper, I have made it clear that the story was created by Buddhist priests, and handed down by preachers.